

わたしは、25年以上前からスウェーデンや認知症家族会との出会いを通じ、大事なことを学んできました。

当時よく言われた「施設から住まいへ」という表面的な言葉だけでなく、「自分の母親を入れたい。」「自分がそこに入りたい。」「利用者の笑顔が見たい。」等々・・・心の部分の大切さを学び、ここまでやって来たように思います。



『とにかく自分が入りたいと思える施設を考えた。今までは事業者が施設をつくる時に「自分が入りたい。」と考えていないものが多すぎた。』

これは、以前設計した特別養護老人ホーム「中野けんせいえん」の前施設長 竹永氏のお言葉です。私はその言葉を聞いた時、友人を得たような気持ちになりました。

多くの高齢者介護施設が整備された現在、今後は厳しい時代になる事が予想されます。特に、「権利者意識が高い。」団塊の世代が後期高齢者になる時代に移行した場合、住環境を含め様々な課題が出てくるような気がします。その為には、より良い住環境で質を重視し、「顧客満足度」をあげる事が重要ではないかと思えます。

わたしたちはこの仕事に30年以上携わってきましたが、ある施設開設時に利用者家族から・・・「こんな施設を探していました。作ってくれて本当にありがとう。」と言われた時の嬉しい気持ちは忘れることができません。



療養室・居室



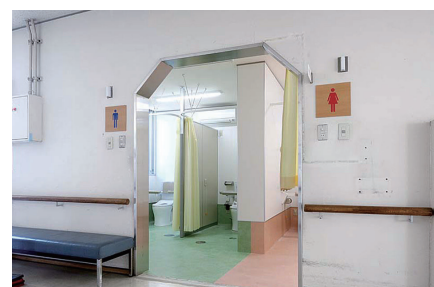
食堂・デイルーム



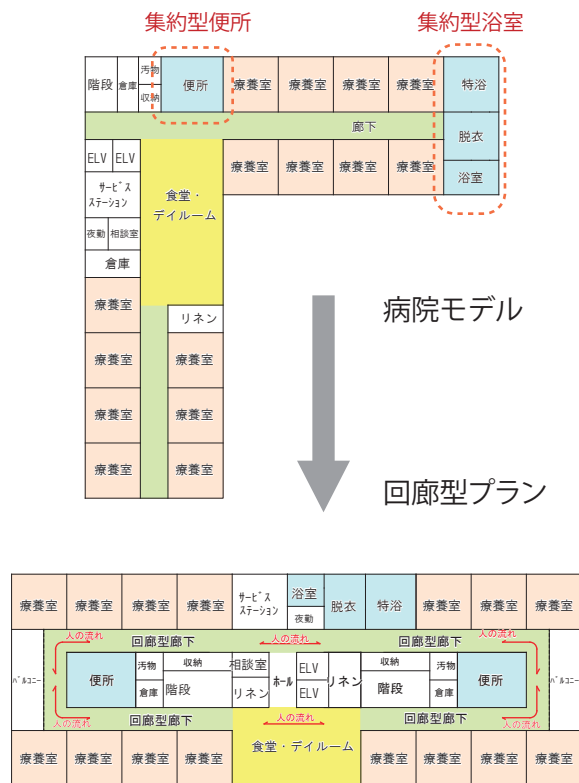
廊下



浴室



便所



## 高齢者施設の建物とケアの歴史

1980年代：病院がモデル  
多床室・集約型(食堂・便所・浴場)

物扱いの時代  
集団ケア(流れ作業)

集約型の傾向は若干薄まるが、認知症徘徊対策から延々と歩かされる「回廊」が生まれる

「入所」

1990年代：認知症対策から回廊型プランが流行  
多床室主流から一部個室へ、集約型から個別型へ徐々に移行

「人」より病気を優先の時代  
未だ集団ケア

### 介護革命

2000年4月 介護保険が施行 行政措置から社会保険制度へ大転換

## 「生活の場」

2000年代：個室・ユニット型特養へ(2002年に制度化)  
個室・分散型(食堂・便所は生活単位ユニットの中へ)

「人」として見る時代へ  
個別ケア(プライバシーと尊厳)

ユニット型特養に  
老人保健施設も徐々に追随

- ・ユニット内で食事を提供(キッチンの常設)
- ・トイレは分散されたが、個室トイレは普及しない
- ・最近、感染症対策への有効性も確認された